



本堂前の紫陽花



木漏れ日

源昌寺通信

第4号

発行元：浄土宗 源昌寺
令和6年7月発行

5年ぶりに開催 佐賀教区吉水講詠唱大会



令和6年3月6日（水）午後から第41回佐賀教区詠唱大会が開催されました。今年度は、鹿島組が当番となり、新しくなった鹿島市民文化ホールにての開催となりました。源昌寺支部からは、9名が出場し、「鎌倉光明寺の御詠歌」「仏名会和讃」の2曲の詠唱を奉納いたしました。

コロナ後の久しぶりの開催となり、県内各地から大勢の講員が集まり、日頃から稽古していた曲を力いっぱいお唱えされていました。

この大会は、詠唱の鍛錬だけではなく、講員同志の親睦も深め、詠唱を通して法然上人の開宗の基本理念を学ぶ場でもあります。



想いをつなく施餓鬼法要



令和6年5月21日（火）13：00より施餓鬼法要を行いました。コロナ禍では、午前中に一般参詣者、午後に初施餓鬼のご家庭と分けての開催でしたが、以前のような形に戻しての開催は、今回で2回目となりました。まだ5月でしたが、大変暑い日となりました。たくさんのご参詣を頂きありがとうございました。

お施餓鬼法要は、有縁の仏さまだけではなく、無縁の仏さまも一緒に供養をする大切な行事です。亡き人の想いをつなく。残された私たちの「こころ」をつなく。大切な行事に沢山ご参詣いただき一緒にご回向をいたしました。必ずやその声と想いは届いたはずですよ。

「施餓鬼」は「餓鬼（がき）」に「施す」と書きます。仏教では施しのことを「布施」といいます。

布施というと法事などの際にお寺や僧侶に渡すもの、いわゆる「お布施」の事を想像しがちですが、それだけではありません。お経には、財力とは関係なく実践でき、それによって相手が幸せになり、自身も功德が得られる布施が説かれています。

お施餓鬼の由来については、こちらのQRコードからご覧になれます。



住職コラム

夏になるとふと、思い出すことがあります。僧侶として歩んで間もない頃のことです。あるご家庭で、50年近く連れ添われたご主人が病気で亡くされました。私は、そのご家庭へ初七日の法事のため赴きました。読経を済ませ、その家のおばあちゃんと話をすると、「子どもたちは皆、大阪・東京で仕事をしています。」「お母さん、初七日忌までは何とか休めたけれど、仕事で二・七日忌以降は遠いから無理よ。ごめんなさい」「四十九日の法事には来るから」当然、すぐに駆けつけられる距離でもない。休みが長く取れるものでもない。分かってはいたものの、初めて一人になること、「孤独」を感じていることに気づかれたのである。二・七日忌は、親類が少し集まるくらいの人数でした。「寂しいです」と悲しく折れそうな声で私に話されました。どこの家庭と変わらさず、連れ添い、たまには喧嘩もされたでしょう。苦しさ、嬉しさ、楽しさ、悔しさ。すべてとはいきませんが共有された日々があったでしょう。長く連れ添った伴侶を失ったとき、人は何をしたらよいのでしょうか？何に安らぎを求めたらよいのでしょうか？人は「支えられている」「生かされている」「そう感じる事ができる時間」がどれほどあるのでしょうか？「また、お伺いしますね」そう告げて玄関を出て、車に乗り込みルームミラーを見たとき、深々と頭を下げお辞儀をして私を見送って頂いたおばあちゃんの姿を今でも忘れることが出来ません。辺りは夏真っ盛り、蝉の音が響き渡っていました。グリーンケアはとても大切です。